

聖書：マタイ 5：6

説教題：義に飢え渴く者は幸い

日時：2017年5月21日（朝拝）

今日は山上の説教の最初の部分で語られている「キリスト教における幸い」についての教えの4つ目を見て行きます。ここにはこれまで見て来た中でも特に激しい言葉が出て来ます。それは「飢え渴く」という言葉です。原文のギリシャ語では「飢えている人」そして「渴いている人」と、現在分詞の言葉が二つ重ねられて、激しく求める姿が描かれています。今日の多くの人々は、私も含めて、本当の意味で飢えるという経験をしたことがなく、この言葉が持つメッセージ性を良く理解できないかもしれません。しかしそこまで行かなくても、お腹がすいてどうしようもないという経験ならあると思います。ランチが軽すぎて夕飯までの間にお腹がグーグーなるとか、仕事や様々な事情によって食事の時間がいつもより相当遅くなった時など、やっとありつけた食事を夢中になってがつがつ食べるという場合があります。またのどの渴きもそうです。運動をしたり、外を歩き回って、なかなか水分が取れない状況が続いた後に、やっと自動販売機を見つけてペットボトルを購入すると、私たちはキャップをむしり取るようにして開けて一気にゴクゴクと飲みます。こちらも激しい姿です。このような人が幸いとイエス様は仰います。果たして何にそのように飢え渴く人が幸いなのでしょう。

それは「義」と言われています。義とは何でしょうか。それは簡単に言えば「正しさ」のことです。もちろん聖書が語る義ですから、これは神の前での正しさのことです。何よりも義の基準は神様です。神こそ義なるお方。その義なる神から見て正しいこと、神が良しとされることです。その義に飢え渴き、これを熱心に追い求める人が幸いである。果たしてこのことは私たちに当てはまるのでしょうか。私たちは正しいことは大切なことだと思っています。悪いことがまかり通ってはならない。悪が横行するより、正義が支配する方が良いと思っています。しかしだからと言って義を一生懸命求めているかと言うと必ずしもそうではない。なぜそうかと言うと、いつも正しいわけではない私たちにとって正し過ぎることも都合が悪いからです。それは自分の首を絞め、自分がさばかれる結果にも至る。だから「ほどほどの義」を好む。たとえば「ウソも方便」という言葉があります。正直なことは良いことですが、全く正直だとうまく行かないこともあります。ですからそこに良い目的や理由があるなら状況によってはうそをつくことも許される。多くの人々はこのように考えて時と場合によってウソをつくことを肯定し、容認し

ます。しかしこれでは義に飢え渴いているとはとても言えないのではないのでしょうか。また自分の生活を振り返って、こう質問してみてください。自分は果たして毎日をどんな基準によって歩んでいるだろうか、と。神から見て何が正しいことを考え、その義に従って義の道を歩もうとしているか。それとも義のことはあまり考えず、それよりも今の自分にとって都合の良いこと、得すること、自分の幸せにつながることを直感的に感じ取って、その道を歩んでいるのか。今回私もこの御言葉を通して、自分は本当に義を飢え渴いて求めているだろうかと問われました。私たちは義についてあまり難しく考えると苦しくなるから、それについてはほどほどにして、それよりも今楽しく、今自分が幸せと感じる道を選び取って生活しようとする人が多いのではないのでしょうか。義を求めることはあまり幸せにはつながらないと考えて、これを遠くへ押しやっけてしまっているのではないのでしょうか。しかしイエス様は「義に飢え渴く人こそ幸いだ」と言われました。ですからこの義の道を通らないで、ただ幸せを求める人は本物の幸せに行き着かないということです。一時的に目の前の幸せを手にするかもしれませんが、それはその人の本当の幸せには至らない。振り返って見ると私たちは色々なものに引きつけられて生活していますが、本当の幸せに生きているのでしょうか。むしろ私たちが求めている幸せは私たちから益々逃げて行っているのではないのでしょうか。イエス様は義に飢え渴く者が幸いと言っています。ですから私たちは真の幸いに生きたいと思うなら、この「義に飢え渴く生活」へと進まなければならないということになります。

では義に飢え渴く生活とはどういう生活なのでしょう。またどうすればその生き方ができるのでしょうか。これまでも見て来た通り、山上の説教における幸いについての教えはバラバラに並べられているのではなく、きちんと順番があるようです。ですからここに至る道筋は、その前の3～5節を見ると分かって来ます。まず3節で「心の貧しい者は幸いです」と言われました。自分には良きものが一切なく、靈的に破綻している者であることを認めて、神の前にくず折れている人。その人こそ天の御国の構成員であると言われました。続く4節では「悲しむ者は幸いです」と言われました。特に自分の罪深さを認めて、神の前に悲しむ人。神はその者を慰めてくださる。そしてそういう人が5節にあるように「柔和な者」あるいは欄外に別訳がありますように「へりくだった者」になります。その人たちは地を受け継ぐ。そして今日の6節の「義に飢え渴く人」となります。これは自然な流れと言えます。ここまで特に自分の貧しさを認め、罪を悲しみ、そんな者をあわれんでくださる神を知った人のことが書かれて来ました。その人はその状態にとどまりません。自分の罪を本当に悲しんだ人は、そこから脱け出ようと

します。罪の生活から離れて義の生活を願うようになります。また5節の最後に「地を受け継ぐ」とありました。これは究極的には天の御国を受け継ぐ者になるということでした。神はこんな私をご自身のきよい御国に入れてくださる。私はやがて正義が支配する天の御国に住まわせていただく。そのことを知ったら私たちは義に飢え渴く者となってこそ本当ではないでしょうか。私はやがて義なる神とともに義で特徴づけられる御国に住むのです。とするなら、素晴らしいその将来を見つめて義に飢え渴く生活へと進んでこそ本当ではないでしょうか。

ですからこの義に飢え渴くとは、まず自分自身が益々聖い歩みをする者となることを求めることです。今までの罪の生活とさようならをして、新しい義の生活を切望することです。そしてまた義を飢え渴くようにして求めることの中には、自分だけでなく、周りの社会もそう変わっていくことを求めることも含まれるでしょう。神の御前にあるこの世界が益々神ご自身の義を反映する世界となるように。御心が天で行なわれているように地でも行なわれるように。ここが悪ではなく、正義が支配するところとなるように願ひ、取り組むことです。

さてこれまで理想的なことを語って来ましたが、果たしてこのような高尚な生活は私たちに可能なのでしょうか。こんな私たちがいくら願っても、義の生活などできないのではないのでしょうか。しかし今日のイエス様の言葉の中には実は大きな慰めと励ましが隠されています。イエス様はここで「義である者は幸いです」とか、「義に達する者は幸いです」とは仰いませんでした。そうではなく「義に飢え渴く者は」と言われました。これが意味していることは何でしょう。それは私たちは自分の力で、この義に到達することはできないということです。もしそこに到達できるなら飢え渴く状態は終わりになるはずですが。しかしそうはならない。つまりこの言い方は、私たち人間は一生懸命そこに到達しようと努力するけれども、なかなかそこに到達できないということ、いや自分の力では決して到達できないということを暗示しています。そのためにあえぎ、フラストレーションの状態にある。しかしそれで良いとイエス様は言っているのです。その人が幸いであると。ここには、そこに到達させてくださるのは神であることが暗示されています。私たちにできないことを神がなさしめてくださる。私たちとしては義に飢え渴く状態にあれば良いのです。そこまでで良いのです。

今、そこまでで良いと言いましたが、逆から言えば、これがこの幸いにあずかるため

の条件であるとも言えます。祝福はただ神の恵みによるからと言って、私たちは何もしないでただ座っていれば良いのではない。私の力で義に達しなくても、これを飢え渴くようにして求めることが私たちには必要です。求めなければ受けないのです。7章7～8節：「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」自分の力ではとても義に到達することはできず、そのためにあえぎ苦しむけれども、そのように求める者に神がそれを与えてくださる。そうして私を天国まで導いてくださる。そのことを見つめて、飢え渴く生活、求め続ける生活を続けて行けば良いのです。

その者に対する約束の言葉を最後に見たいと思います。6節後半：「その人たちは満ち足りるから。」この「満ち足りる」と訳されている言葉は「お腹一杯に食べさせる」という意味の言葉です。この言葉が原文では受身形で書かれています（新共同訳：「その人たちは満たされる」）。この受身形の表現は、満たしてくださるのは神であることを示しているでしょう。私たちは自分の力では決して義に到達できず、うめくようにして求めるだけですが、そうした取り組みの中で神が私たちを豊かに満たしてくださるのです。まるで美味しいものをたらふく食べて、お腹が満腹になった時のような幸せに満たしてくださる。もちろんこの満たしは霊的な満たしですから、単にお腹が一杯になった時の幸福感とは比較にならないレベルで、私たちの存在をその根本から豊かに深く満たす満たしです。これは義に飢え渴く者に約束されている祝福です。私たちが義に飢え渴かず、義を行なおうと格闘する歩みに進まなければ、そこに神との真の交わりはありません。従ってその神との交わりから来る満たしは与えられません。しかし神が喜ばれる正しいこととは何かを理解し、神に祈りながらそれを行なおうと取り組む時、私たちは神との本当の交わりに生きる者となるのです。そしてその神との交わりを通して豊かに満ち足りる者とされるのです。この私をいくらかでも義の道に歩ませてくださる神の力を味わい、満たされるのです。しかし私たちの歩みはまだ理想状態からは程遠いものですので、なお飢え渴いて神に求める生活が続きます。そしてその神との引き続く交わりの中で益々神の恵みと力を味わい、私たちは満たされるのです。

そしてこの祝福が究極的に成就するのはやはり天の御国においてでしょう。やがての天国における祝福は色々な箇所で大宴会にたとえられています。イザヤ書25章6節：「万軍の主はこの山の上で万民のために、あぶらの多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓

の多いあぶらみとよくこされたぶどう酒の宴会を催される。」 またヘブル書 12 章 22 節：「あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。」 私たちはこのような「大祝宴」あるいは「大祝会」と表現されている天の御国の祝福にあずかり、完全な満たしを経験します。そしてその天の御国はⅡペテロ 3 章 13 節では「正義の住む新しい天と新しい地」と言われています。神の祝福と満たしは、正義の国にあるのです。ですから私たちは義に飢え渴き続ける歩みが必要です。そうして神の導きをいただいて正義が支配する天の御国に入る者となってこそ、この究極的な満たしはついに私たちの上に成就するのです。

果たして私たちは義に飢え渴いている者でしょうか。自分を振り返ると、それとはほど遠い生活を送っている自分を思わされるかもしれません。そし義には飢え渴いていないのに、他のもの、特にこの世のものに一生懸命飢え渴いている自分を発見するかもしれません。この世の富や名声、この世の持ちもの、この世の新製品、この世の快樂、……。それらはまさに飢え渴くように求めている。しかしイエス様が言われる幸いはそこにはありません。イエス様は「義に飢え渴く者こそ幸い」と言われました。私たちはこのことを心に留めて、今日からまた新しくこの真の幸いの道に進みたいと思います。そのためには、神の前で正しいこととはどんなことなのか、聖書を開いて神のみこころを学ぶことが必要です。そしてその義を実際に行なう生活へ進むことが大切です。私たちは自分の力では決して理想通りに行なえないので、神に祈り、神に信頼し、神と交わりながら取り組んで行きます。このような人こそ、今日の節で約束されている深い満たしを経験する者となります。それはこの世が与える一時的で過ぎ行く満足よりもはるかに深い満足を私たちに与えてくれます。そしてこの歩みの積み重ねを通して、私たちはついに神の義が支配する神の御国に入る者とされるのです。私たちはイエス様のこの言葉に感謝して、この真の幸いの道こそを今週も進みたいのです。「義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから。」